

「リズムをつかめ！コンビネーションスイミング」の実践を通して

鳥取県米子市立明道小学校 近藤 肇

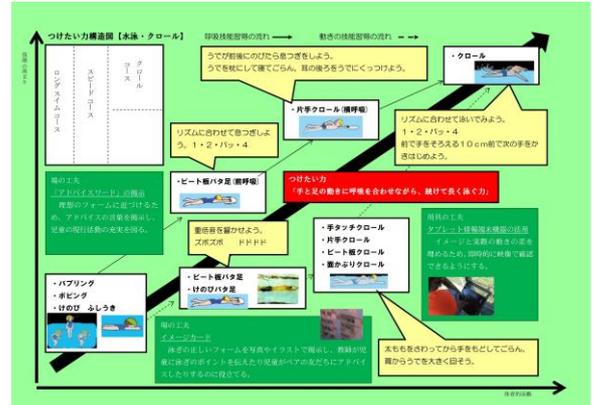
1 はじめに

小学校高学年の水泳では、低・中学年で学習経験を生かし、一人一人が自己の能力に応じた課題をもち、練習を工夫し、互いに協力して学習を進めながら、水泳の楽しさを味わうことができるようにすることが大切であると考えます。そこで、ペア学習を中心に児童が自己の課題を克服するために主体的に取り組み、アドバイス等をし合いながら泳力を高める子どもの育成を目指して取り組んだ。

2 研究の実際

(1) 学習内容の明確化

単元計画の中に「主なねらい」と「核となる学習内容」を明記することによって、学習内容の明確化を図った。そのよりどころとして、本実践では「つけたい力構造図」を作成し、単元前半から後半にかけて児童の様相が高まっていくことを示した。



(2) 学習過程の工夫

単元の前半を「活動①」（習得）中心に、単元の後半を「活動②」（活用・探究）中心に行う単元構成とした。単元前半でクロール、平泳ぎの泳ぎ方をしっかり身に付け、単元後半の「活動②」において、児童がそれぞれの実態やめあてに応じて練習場所や練習方法を選び、獲得した技能を活かして学習することをねらった構成である。

(3) 効果的な指導

①2 学年合同での水泳学習

本校では低・中・高で2学年合同の水泳学習を行っている。単一学年で水泳学習を行うより教員数が増え、児童の活動をよりきめ細かく見取ることができ、また児童に対してよりきめ細かくアドバイスを送ることができる。さらに下学年で十分泳力が備わっている児童や上学年でまだ泳力が不十分な児童にとっても、異学年で学習することで自分の泳力にあった適切な練習を行うことができ、学習が深まると考える。

②場の設定

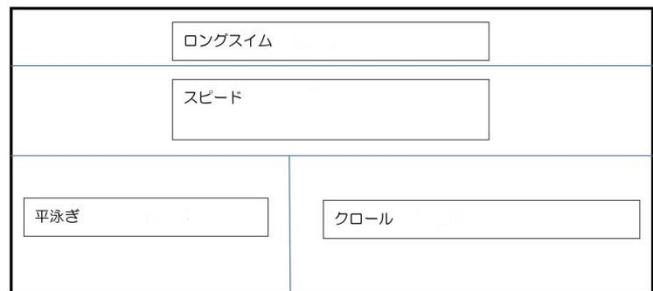
本実践では、活動②（活用・探究）において、次の4つのコースを設定し、プールを右図のように設定した。

③タブレット端末の利用

児童が自己の泳ぎを視覚的に確認し、よりよい泳ぎの修正ポイントをつかむために、タブレット端末を使って指導、支援を行った。自分の泳ぎを自らの目で確かめることで、児童相互の学び合いをより深めることをねらった。

(6)単元の流れと評価の計画(11時間扱い ※1～10は2時間単位, 11が1時間単位)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
ねらい	学習の進め方を理解し、よ。		腕のかき方やキックの仕方、呼吸の仕方をも身につける。				手と足の動きに呼吸を合わせながら、続けて長く泳ぐことに挑戦しよう。				記録に挑戦しよう。
核となる学習内容	学習の見通しを持つ 自らの力を知り、めあてを持つ		クロール ・手のかき、ばた足を中心に練習。 平泳ぎ ・キックを中心に練習。				クロール ・手のかき、ばた足、ローリングを用いた呼吸 平泳ぎ ・手のかき、手と足のタイミング(呼吸をしながら)				記録会
学習活動(一歩かす・チャレンジする)	オリエンテーション										
学習活動(二歩かす・チャレンジする)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>活動① ドリル</p> <ul style="list-style-type: none"> ○クロール ・けむぎ ・ビート板ばた足 ・タッチクロール ・壁呼吸一歩呼吸 ・浮き具を使っての手のかき ・クロール </div> <div style="width: 45%;"> <p>活動① ドリル</p> <ul style="list-style-type: none"> ○平泳ぎ ・手のかき ・ビート板ばた足 ・浮き具を使っての手のかき ・クロール ・平泳ぎ </div> </div> <p>活動②</p> <p>自分のめあてにあったコースを選択し、泳力を伸ばす。</p> <p>(きれいなフォームで25mコース(クロール))</p> <p>(きれいなフォームで25mコース(平泳ぎ))</p> <p>(リズムをとってロングスイムコース(クロール)(平泳ぎ))</p> <p>(リズムをとってスピードコース(クロール)(平泳ぎ))</p>										
評価の計画	①						②		③		記録会を行い、自分の伸びを確認し、水泳学習を振り返る。
関係する技術			①		③						②④



(4) 言語活動の充実

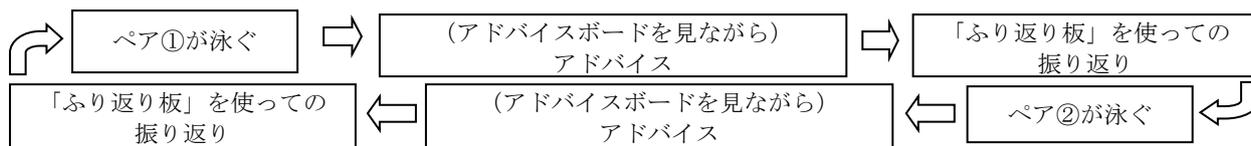
①ペア学習の充実

学習は常にペアを組んで行った。「活動①」(習得)については、得意な児童と苦手な児童を意図的に組み、得意な児童が苦手な児童にとってモデルとなるようにした。また「活動②」では、異学年のペアも取り入れ、「活動①」同様、6年生が5年生にとってモデルとなるようにした。

②言語活動の充実を促進するアドバイスボードの設置・活動の流れの工夫

プールの各所に「アドバイスボード」を設置した。「アドバイスボード」には「キック」「ブル」「呼吸」の観点ごとに写真またはイラストを示したり、「わたしたちの体育」を活用したりして、正しい姿勢や動きが一目で分かるようにした。

また常に児童が自己の活動を振り返ることができるように、「泳ぐ→振り返る」の一連の流れを「学習のサイクル」として繰り返すようにした。児童が互いの泳ぎについて教え合い、気づき合うなかで、豊かな、的確な表現が効果的に働き、言語活動の活発化、泳ぎの変化につながると考えた。



3 成果と課題

(1) 成果

- 学習内容を明確にし、それをアドバイスボードや教師の指導言に生かしたことで、児童一人一人が自己のめあてをはっきりとをもって活動することができた。
- 単元前半を「習得」に当てることで、児童が技能獲得のための適切な練習方法を理解することができた。そして単元後半の「活動②」(活用)において、児童が様々な練習方法を活かして学習し、自己の泳力を伸ばすために工夫して練習を行うことができた。
- ペア学習をするなかで、「ふり返り板」「アドバイスボード」を活用し、児童が学習内容に対する「楽しさ」「できばえ」について、絶えず積極的に話し合い、ペア相互の泳ぎの修正点を共有しながら学習を進めることができた。
- アドバイスボードやタブレット端末などで泳ぎのポイントを確認しながら学習することで、児童が学習に対して明確な課題をもって学び合うことができ、言語活動の充実につながった。

(2) 課題

- 「習得」を「クロール、平泳ぎの泳ぎの習得」ととらえたために、「習得」にかける時間が多くなってしまった。「習得」のとらえを「クロール、平泳ぎの習得に向けた手、足、呼吸一つの動作の習得」とすることで、児童の学びやコース選択もより柔軟なものとなり、興味をもって学習に取り組むことができたのでは考える。
- アドバイスボードを十分に活用しない児童が見られた。アドバイスボードの内容について整理するとともに、活用方法等をより具体的に児童に伝えることが大切であると感じた。
- タブレット端末の活用方法について、モデルとなる泳ぎを撮影、例示するなど、さらに研究を深めることでより効果的に児童の学習にはたらくのではと考える。

